

# 男女共同参画社会関連意識の分析(1)

—白山市民についての性別、年代、家族形態との関連—

## Analysis on Consciousness Related to the Society of Men's and Women's Partner-ship (1)

— Concern with the Sexual Distinction, the Generation, and the Family Form of the Hakusan -City Citizen —

菱 田 陽 子

男女共同参画社会に関する白山市民の意識調査について、家庭に関する事柄を中心に、性、年代、家族構成による回答傾向の比較を試みた。いわゆる家事については妻の役割であるとの認識が多く、いくつかの性差、白山麓地域の特徴も認められた。また、男女とも年齢が上がるにつれて妻の役割であるとする傾向が強い。3世代のように家族構成が複雑になるほど、家族で分担すべきと考え、妻の役割とする傾向が低下する。育って欲しい子どもの姿については、男女とも高齢者は女の子に対して家庭を大切にすることを挙げ、家族形態が複雑になるほど、協調性や他人から好かれることを重視する。「男は仕事、女は家庭」なる考え方に男性高齢者が肯定し、「女性の能力開発のための研修や社会参加」には、男女とも半数以上が「家事や育児に影響しない範囲」としている。少子化の原因については、男性の女性の生き方への理解が窺える一方で、若い世代は子育ての経済的負担、自分の余暇の充実が原因だとする等、年齢差が認められる。多くの高齢者は、女性の就業が少子化の原因であるとしている。女性が働き続ける条件として、女性は働き続けるための環境造りを、男性は子育て環境充実を考え、対照的である。これらの分析結果をふまえ、男女共同参画社会実現の課題について考察した。

### はじめに

白山市は、今後の男女共同参画社会実現を目指して、市民の男女共同参画社会に関する意識調査を実施した。白山市は、1市、2町、5村の合併により平成17年2月1日に発足している。これらの必ずしも同じ歴史的文化的背景を持たない市町村からなっている白山市民の、旧地域による意識の相違もあるかも知れない。

その基本的な分析についての報告書(白山市男女共同参画計画策定委員会、以下これを「第1次分析」と呼ぶ。)は、県(石川県「男女共同参画に関する県民意識調査」平成17年7月)、国(全国「男女共同参画に関する世論調査」内閣府 平成16年11月)の結果と比較、検討している。この調査の主な内容は、Ⅰ 男女の地位の平等、Ⅱ 家庭生活、Ⅲ 職業、Ⅳ 社会的な生活、Ⅴ 女

菱 田 陽 子

性の人権、VI 男女共同参画社会の実現に向けて、の6領域にわたっている。この第1次分析で明らかになった内容は、大凡以下のとおりである。

男女共同参画社会の理解について、半数程度が何らかの形で「理解している」としており、女性に比較して男性がより理解しているとする傾向にある。

家庭や職場などにおける男女の地位の平等感について、性差や多少の年代差も認められるものの男女とも、男性優遇と感じている場が多い。石川県の調査と比較すると、男性優位と感じている共通性はあるが、全ての項目で白山市の方が多少低い。

「男は仕事、女は家庭」という考え方に、否定的な者は4割強（男女ほぼ同じ）である。年代別では、これを肯定する者は、国や県よりも低い、50代以下と60代以上の格差が大きい。

女性の能力開発のための研修や社会参加については、男女とも、半数強が、家事や育児に影響しない範囲ならよいとしており、男性がやや強い。

家庭の仕事の役割に関して、妻の役割とする傾向がとて強く、食事のしたく、食後の後片づけ、洗濯、掃除、日常的買い物についてとくに顕著である。かなりの部分に明白な性差や地域差、年代差があった。白山麓地域が他地域と異なる傾向を示し、年代が上がるにつれて妻の役割が上っているものが多い。多くの領域で県との間に開きが認められた。

「女性の就業が結果として少子化を招いている」なる考え方について性差はなく、「そうかもしれない」が半数近く、「そうは思わない」が3分の1程度であり、肯定されているとは言えない。

子どもの教育方針に関して、回答者の性差はないが、子どもの性別による違いがある。

子どもの進学に関しても性差はなく、男の子については、「大学」、「本人の意志に任せる」が多い。年代別では、40代以上で5割以上が「大学」教育を望み、30代以下では「本人の意志に任せる」が多い。地域別にみると、白山麓地域のみ、大学進学を望む傾向が男性により強い。女の子については、女性の方が「本人の意志に任せる」、男性の方が「大学」、「短期大学・専門学校」が多い。年代別では、「本人の意志に任せる」が30代以下で、40代以上に比較して多い。地域差では、「本人の意志に任せる」は、鶴来以外では、女性がより多い。また女性の「本人の意志に任せる」傾向が、県より多い。

受けたい介護に関しては、「病院や介護施設に入り療養したい」、「自宅で福祉サービスの援助を受けたい」が4割弱で、男性がより「自宅で家族の介護を受けたい」としている。

職業での男女平等に関しては、職場において、「昇進・昇格」、「人事配置」、「賃金」は男性優遇と感じているのに対して、「教育や研修制度」のみ平等と感じている。「仕事の内容」「募集や採用の条件」については「男性優遇」、「平等」が同程度、「女性優遇」はいずれも極めて少ない。

女性の就業継続に必要なこととして、「男女とも育児・介護休業制度を取得しやすい環境」、「保育施設や保育時間の延長」、「育児などによる退職者の再雇用制度」が挙げられている。

現在の仕事以外での団体やグループ活動について、「地元の町内会活動」（特に男性）、「趣味や教養、スポーツ等のグループ活動」が選ばれている。

今後活動したいものについては、「趣味や教養、スポーツ等のグループ活動」、「ボランティア活動」等が挙げられ、これらの活動に参加していない理由については、「仕事が忙しくて、時間がない」、「関心がない」について男性の方が、「家事・育児・介護が忙しく、時間がない」（特に

女性)、「人間関係がわずらわしい」が挙げられている。

指導的な立場の女性が少ない理由として、「長い間の習慣で男性と決まっている」、「女性自身が指導的立場となることに消極的」とする者が男性により多い。

老後の生き方については、「趣味やサークル活動を楽しむ」、「友人や地域の人と交流する」(男<女)、「自分の能力を生かした仕事をつづける」(男>女)、「健康づくり」が選ばれている。

「女性の人権尊重がなされていないと感ずる」ものとして、売春、暴力、セクシュアル・ハラスメントを挙げる者が多く、性犯罪等をなくすためには、「過激な内容の雑誌、ビデオソフト、ゲームソフトなどの販売をさける」、「法律、制度、制定のみなおし」等が多く挙げられている。

男女共同参画社会の実現に向けて、必要なこととして、「男女がお互いの立場を尊重しあう」、「家事や育児・介護などは男性も積極的に分担する」等が挙げられており、男女共同参画社会実現のために行政に望むこととしては、「安心して働ける保育サービス」、「男女の雇用機会均等と待遇の促進」、「労働時間の短縮、育児休業・介護休業制度等の普及」、「高齢者・障害者等への福祉サービスの充実」が多い。

白山市の調査報告では、その集計結果を明示しているが、その意味づけは殆どなされていない。

ここでは第2次分析として、合併前の歴史的文化的背景の異なる可能性がある地域差があるか否か、また、市民の年代(年齢段階)によって相違があるか否か、更には家族形態による相違や男女差を含めて明らかにしたい。

## 目 的

男女共同参画社会に関する受け止め方や認識は、家庭における生活から発することが多いと思われる。このような視点からここでは、白山市が行った調査項目のうち、先にも述べたとおり、家庭生活に関連した内容及び男女共同参画社会実現のために重要な意味を持つ女性の働きつづけるための条件に限定して、その特徴を明らかにすることを目的とする。

具体的には、以下の事柄について、その全体的傾向、回答者の性別による相違、白山市の旧地域(松任、美川、鶴来、白山麓)による相違、年代による相違、家族構成による相違を明らかにする。なお、これらはもとの質問紙の質問順序とは異なっている。

- ①家庭におけるさまざまな仕事についての夫と妻の分担等に関する認識
- ②子どもがどのように育って欲しいか(育って欲しかったか)について、男の子・女の子別の認識、また、望む(望んだ)教育水準
- ③体が不自由になった時に受きたい介護の形態
- ④男女共同参画社会に関連する意識として、「男は仕事、女は家庭」なる考え方、「女性が能力開発のために学ぶことや社会参加すること」、最近の少子化の原因について、女性の就業が少子化を招いているかに関する受け止め方
- ⑤女性が働き続けるのに必要な条件整備、等に関する認識や受け止め方

## 方 法

調査対象及び手続き 20歳以上の白山市民4,000人に質問紙を郵送し、1,666人(男性691名、

女性975名)より回答を得た(回収率41.7%)。

調査時期 平成17年10月27日～11月21日

調査内容 調査に使用した質問紙は以下の内容からなっている。

フェイスシート：性別、年代、未婚・既婚、家族構成、仕事、居住地域

I 男女の地位の平等：①「男女共同参画社会」の理解度 ②男女の地位の平等

II 家庭生活：①「男は仕事、女は家庭」という考え方 ②女性の能力開発 ③家庭の仕事の役割 ④少子化の原因 ⑤女性の就業と少子化 ⑧子どもの教育方針 ⑨子どもの進学 ⑩受けた介護

III 職業：①職場での男女平等 ②女性の就業継続に必要なこと

IV 社会的な活動：①社会的な活動への参加の現況と今後の活動意向 ②社会的な活動に参加していない理由 ③指導的立場の女性が少ない理由 ④老後の生き方

V 女性の人権：①女性の人権が尊重されていないと感じること ②性犯罪をなくすために

VI 男女共同参画社会の実現に向けて：①男女共同参画社会の実現のために必要なこと ②男女共同参画社会の実現のために行政に望むこと ③男女共同参画についての意見等

ここでは、このうち「II 家庭生活」を中心に分析を試みる。

## 結果と考察

### 1. 調査対象の構成

この調査では、先に触れた4地域について、20歳代から60歳代以上を対象にしているが、全ての地域について、その年齢構成等が同じではない(図1)。例えば、白山麓地域は他の地域に比較して、高齢者が多いのが目立ち、従って、以下分析を試みる際には、これら居住地域要因と年代要因が必ずしも独立でないことを念頭に置く必要がある。例えば、地域による相違が認められ、白山麓地域が他の地域と異なる特徴が認められた場合には、その相違は居住地域の影響でもあるが、年齢層の相違の影響の可能性もある。

また、以下の分析においては、回答者の性別、家族構成、就業形態による相違を明らかにしようとしているが、これらの属性に関しても、これと同様に相互に関連していることにも注意する必要がある。例えば、図2が示すように、男女によって就業形態が異なり、図3に示すように就業形態によりその年齢構成は異なっている。

以下においては、第1分析結果も一部再掲しながら

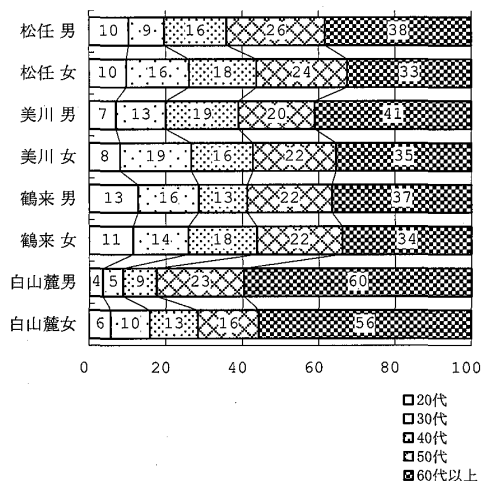


図1 調査対象の構成  
(居住地域、性別、年代別)

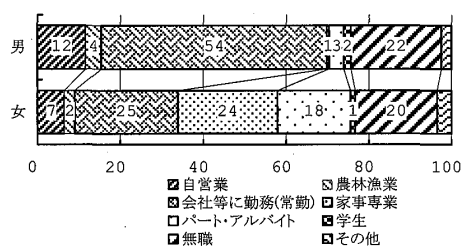


図2 男女別就業形態

ら、明らかになった結果について述べていく。なお、本論文において分布の偏りが認められるか、分布が一様であると言えないか(統計的に有意であるか)については、全て度数を基にした $\chi^2$ 検定(有意水準は5%)によっている。

## 2. 家庭における仕事の分担等について

家庭における仕事の分担等については、家庭におけるいくつかの仕事について、それが「どちらかと言えば夫の役割」であるのか、「妻の役割」であるのか、或いは、「夫婦同程度の役割」か、「家族が分担する」役割であるか等について、「日々の家計の管理」、「食事のしたく」等10項目について尋ねている。

全体的傾向として、「どちらかというとも妻の役割」であるとする仕事が多い。具体的には、「食事のしたく」、「食後の後片づけ」、「洗濯」、「掃除」、「日常の買い物」等、いわゆる家事が、「妻の役割」として受け止められている。これに対して、「子育て」、「PTAや地域活動への参加」等は、「夫婦同じ程度の役割」としている。「家族で分担」すると考えられているものも、「介護や看病」、「食後の後片づけ」、「掃除」、「ごみ出し」等が比較的多くなっているが、「妻の役割」等の方が多く、家族で分担するものとして位置づけられているとは言えない。

家庭内の主な仕事については、依然として妻に期待されているものが多く、夫婦で同じ程度に負担したり家族で分担したりする状況にあるとは言えない。また、夫の役割だとするものは非常に少なく、家庭内での夫の役割は極めて少ないと言える。

これらの事柄に関しては、男女間でかなりの相違が認められると思われる。事実多くの反応について性差が認められるが、あまり明確でないものもあり、性差の現れ方は必ずしも簡単ではない。

家庭におけるさまざまな仕事についての夫と妻の分担等に関する認識について、図5～7の通り、その仕事が「夫婦同じ程度の役割」、「どちらかといえば妻の役割」、「家族で分担」するものとしたものの割合(%単位)をそれぞれ示している。これによりそれぞれの仕事が家族の誰の役割と考えられているかが分かる。

これらの仕事のうち「日々の家計の管理」を除いた全てのものについて、回答者の性による相違が認められる。例えば、「食事のしたく」、「食後の後片づけ」については、女性に比較して男性の方が、どちらかといえば妻の役割だと考え、家族で分担するものであるとは考えない傾向にあり、その他女性は「掃除」、「ごみ出し」、「日常の買い物」、「介護や看病」等については、「夫婦同じ程度の役割」だと考える程度が男性よりも低く、「家族

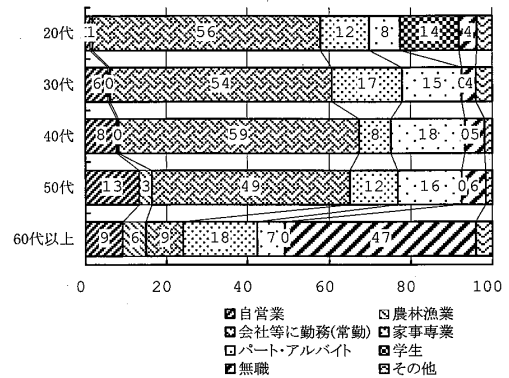


図3 年代別就業形態

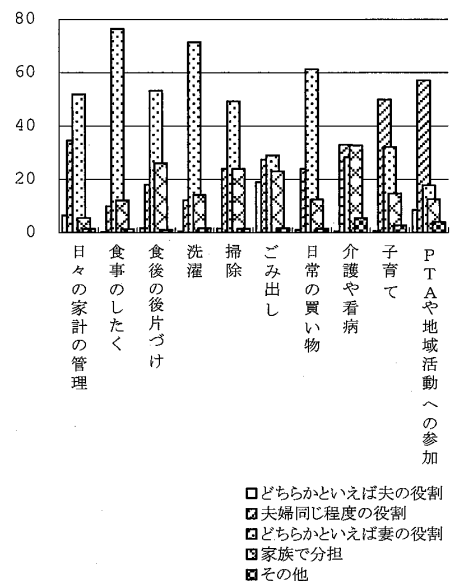


図4 仕事の役割(男女込み)

菱 田 陽 子

で分担すべき役割」だと考えている。「子育て」については、女性の方が男性よりも「夫婦同じ程度の役割」だと考え、「妻の役割」だと認識する程度は低い。このように、家庭の中の仕事の分担については、男性と女性とでかなり認識の相違がある。

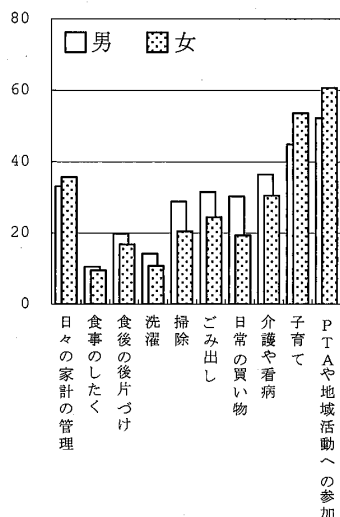


図5 夫婦同じ程度の役割 (男女比較)

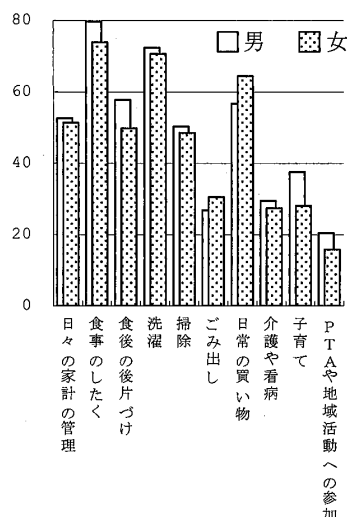


図6 どちらかといえば妻の役割 (男女比較)

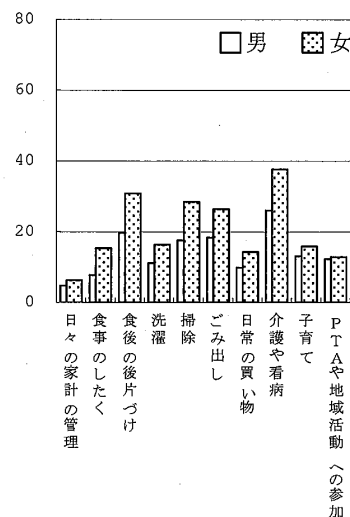


図7 家族で分担 (男女比較)

次に地域による相違を見ると、「日々の家計の管理」は白山麓地域では男女とも、どちらかというとも夫の役割であると認識しており、「食後の後片づけ」は白山麓地域女性では、どちらかというとも妻の役割であり夫婦同じ程度の役割だとは思っていない。「ごみ出し」は、白山麓地域男性では、夫婦同じ程度の役割分担だとより強く思い、夫の役割だとする者が他地域に比較して少ない。女性では、松任地域では夫の役割であるとする者が相対的に多い。

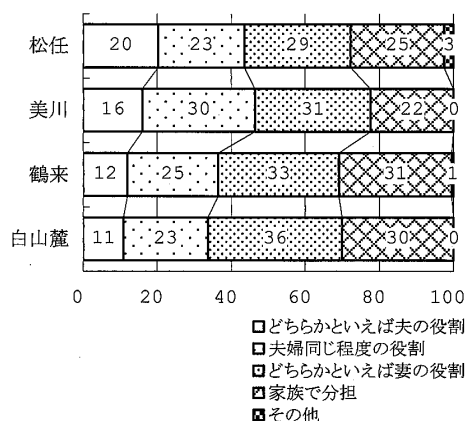


図8 ごみ出し (女性)

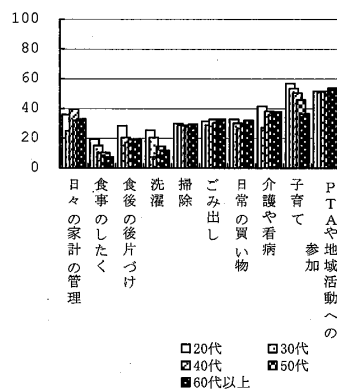


図9 夫婦同じ程度の役割 (男性)

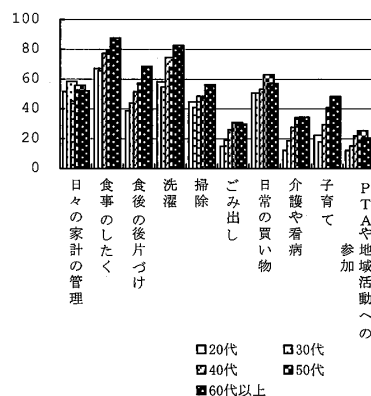


図10 どちらかといえば妻の役割 (男性)

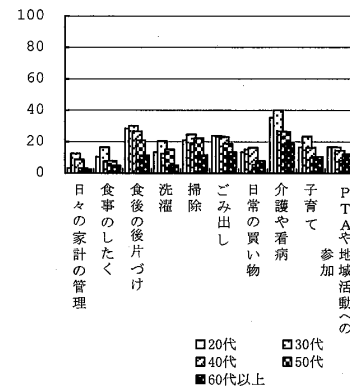


図11 家族で分担 (男性)

# 男女共同参画社会関連意識の分析 (1)

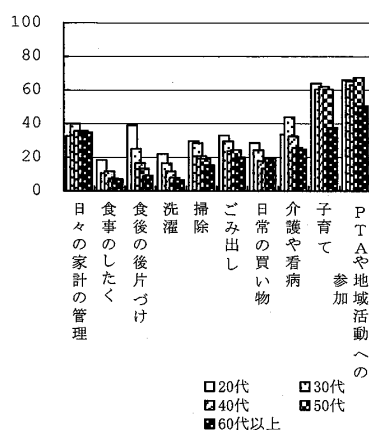


図 12 夫婦同じ程度の役割 (女性)

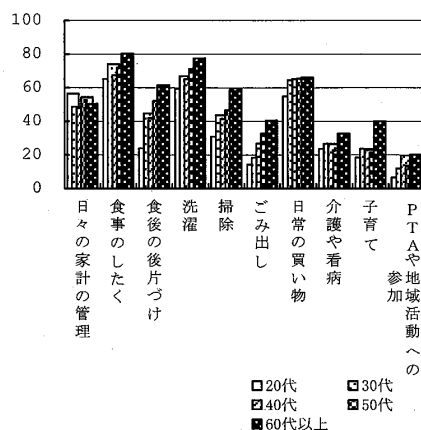


図 13 どちらかといえば妻の役割 (女性)

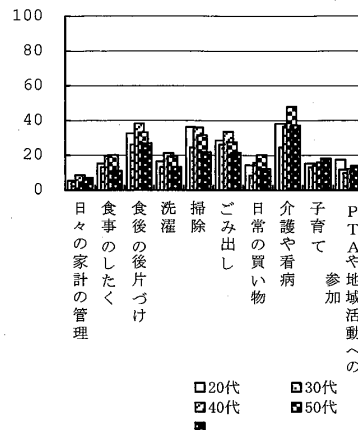


図 14 家族で分担 (女性)

次に年代による相違についてみると、殆どの仕事について年代による相違が認められた (図 9 ~ 14)。ここで挙げられている具体的な仕事のうち、男性については「PTA や地域活動への参加」以外の全て、女性については「日々の家計の管理」以外の全てについて、分布の偏りが認められ、年代の相違によって、その仕事の役割分担についての認識が一致していない。

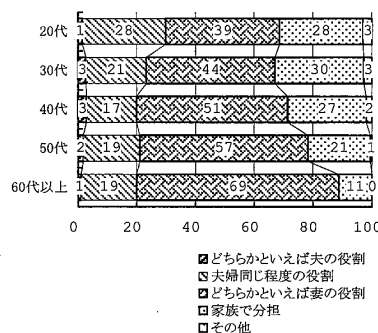


図 15 食後の後片づけ (男性)

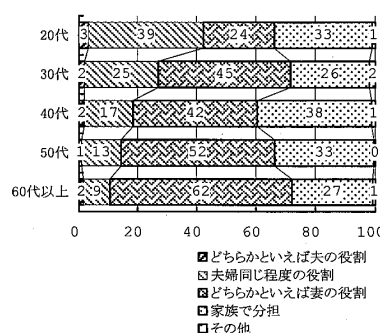


図 16 食後の後片づけ (女性)

その傾向の偏りは、男性の場合も女性の場合も、いわゆる家事については、年齢が上がるに従って「妻の役割」であるとする者が増加していくという共通した傾向が認められ、他方では、男性の場合には「家族が分担する」とする者が減少し、女性では「夫婦同じ程度の役割」とする者が減少する傾向にある。これらの傾向を示す例として、食後の後片づけに関する傾向を示す (図 15、16)。

年齢とともに、妻の役割とする傾向が強くなるが、男性では家族で分担という理解は薄くなり、女性では夫婦同じ程度の役割が薄くなる。男性は家族で分担することを辞め、女性も夫との分担を諦める傾向が見えるのではないだろうか。

次に、これらの傾向の家族形態による相違を明らかにしたい。家族形態としては、夫婦のみ、親子からなる家庭 (二世帯家庭)、三世帯家庭の 3 種類について比較しているが (独身等の分類も可能であるが、その範疇に属する標本数が少なくなるので、ここでの分析から除外した。)、家庭における仕事についてその相違を見ると、夫婦のみ、二世帯家庭、三世帯家庭の順で、「夫婦同じ程度の役割」であるとする者が少なくなり、かつ、「どちらかといえば妻の役割」であるとの考え方も薄くなっている。逆にこの順で、仕事は「家族で分担」するという傾向が強くなっている。この傾向は特に女性に顕著であり、男性ではあまり明確ではない。家族構成が家庭内の仕事の分担にかなり影響を与えていることを窺わせる。

菱 田 陽 子

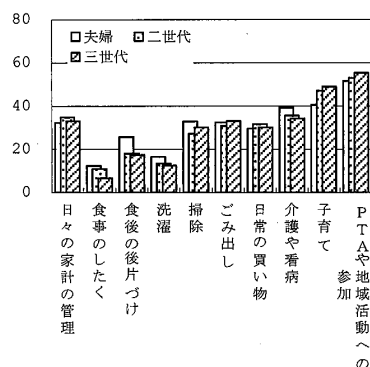


図17 夫婦同じ程度役割 (男性)

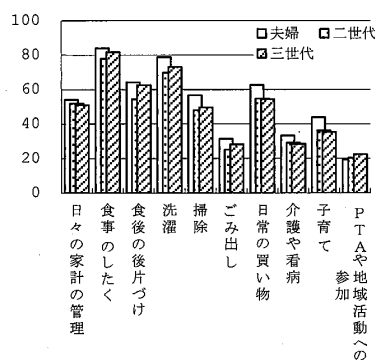


図18 どちらかと言えば妻の役割 (男性)

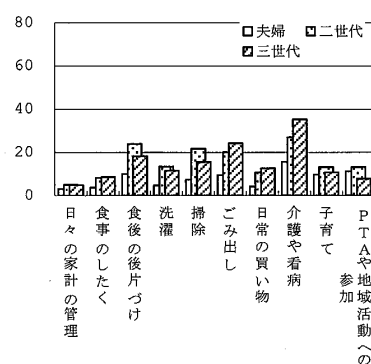


図19 家族で分担 (男性)

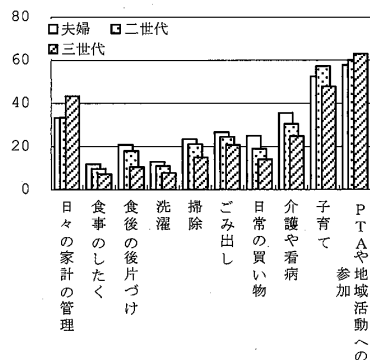


図20 夫婦同じ程度役割 (女性)

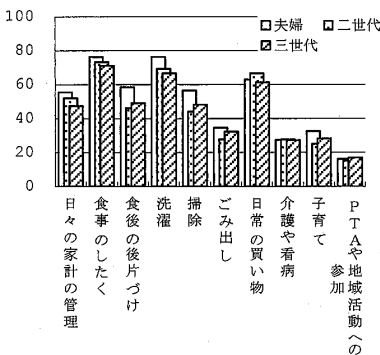


図21 どちらかといえば妻の役割 (女性)

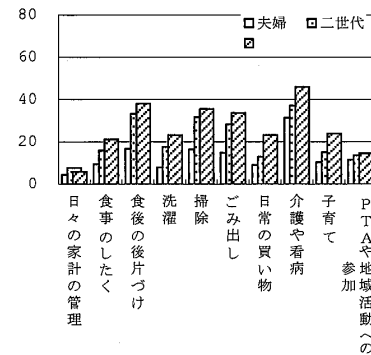


図22 家族で分担 (女性)

### 3. 子どもの育て方について

自分の子どもに対して、どのように育てて欲しいと思っているか、或いは、子育て中に思っていたかについて尋ねているが、これによれば、子どもの性別によって明確に異なっていることが改めて確認された(図23, 24)。

具体的には、男の子については、「活発で行動力ある子」、「責任感の

強い子」、「思いやりのある子」等が期待されている傾向が強いが、これに対して、女の子の場合には、「思いやりのある子」、「気配りができる子」、「家庭を大切にする子」、「誰にでも好かれる子」等が大きく期待されている。特に「思いやりがある」ことについては男女ともに大切な特性であるとしているが、女の子の場合には殆どの回答者がこれを挙げていることが注目される。

現代に生きる我々はこれから育つ子どもたちに対して、性別によって全く異なると言っても良

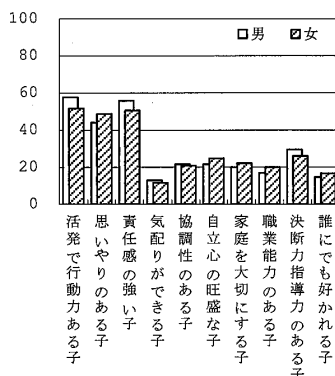


図23 男の子をどう育てたいか (男女比較)

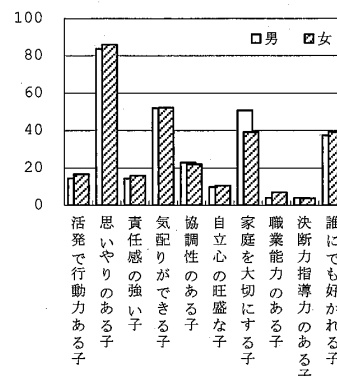


図24 女の子をどう育てたいか (男女比較)



男女共同参画社会関連意識の分析 (1)

いほどの、対照的な期待の仕方をしている。女の子については、他人との協調をもっとも大切なものと考え、誰にでも好かれるように育つことが望ましいとされていることは、男女共同参画社会の構築に向けた、大きな課題がここにあると考えるべきであろう。

どのような子どもに育てたいかについては、あまり多くの性差が認められない。

僅かに、男の子については、「活発で行動力がある子」、「責任感の強い子」に、女の子については「家庭を大切にする子」に育てたいという思いが、女性に比較して男性の方がより強く、他方、女の子を「職業能力のある子」に育てたいと、男性よりも女性の方がより強く思っている。

子どもの育て方については、男の子については地域による相違は認められなかったが、女の子については、自立心旺盛な子について認められ、白山麓地域で男性がこれを多く考えているのに対して、同じ白山麓地域の女性は僅かしかそう考えていない等の傾向がみられる。これを含めて、他にも若干認められる程度であり、さほど明確な地域差があるとは言えない。

年代に注目すると、高齢者が比較的若い者とは異なる受け止め方をしているものが見受けられる。若い回答者は現在子育てをしている者が多いが、高齢者においては既に子育てを終わって、子育てをしているときにどのような子どもに育てたいと思っていたかという、いわば過去の記憶内容に関することであり、回答の質がやゝ異なると思われる。それを考慮した上で、年代差を見てもみると、大凡以下の傾向が認められる。

男の子については、若い男性は相対的に「思いやりのある」ことを望み、「責任感の強い子ども」、「決断力・指導力のある子ども」を育てたいと考えている程度は低い。女性は、男性よりも多くの特性についてより明確な年代差が認められるが、これとは別に「誰にでも好かれる」ことを考えている。高齢者はこの逆の傾向である。

女の子については、男性高齢者が「家庭を大切にする子」を挙げている程度で年代差は殆ど認められないが、女性高齢者は「家庭を大切にする子」を挙げているのを初めとして、多くの特性について年代による差が認められた。「家庭を大

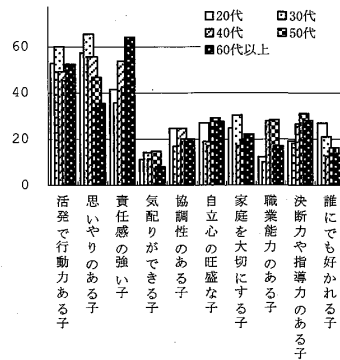


図25 男の子をどう育てたいか (女性)

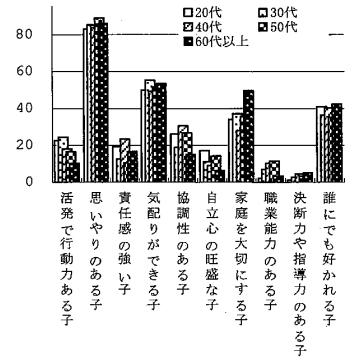


図26 女の子をどう育てたいか (女性)

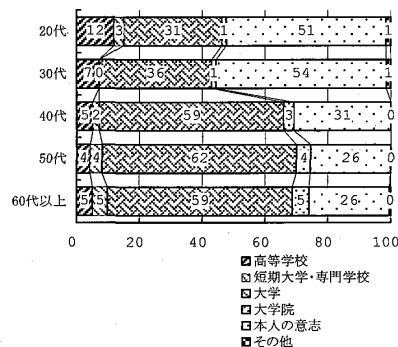


図27 男の子をどこまで教育したいか (男性)

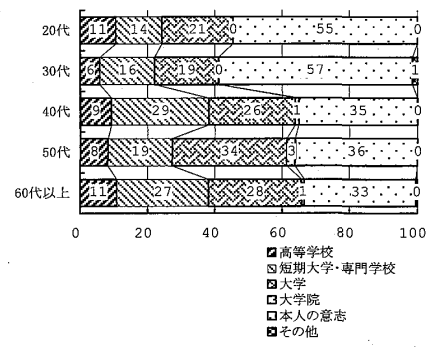


図28 女の子をどこまで教育したいか (男性)

菱 田 陽 子

切にする子」については、男性では若い世代で、女性では若い世代とともに60代以上という高齢者で望まれている。若い世代では家庭の大切さを感じており、女性高齢者では生きてきた経験から家庭の大切さを感じていると思われる。ただし、年齢による一定方向の傾向は認められず、年齢段階による散らばりが認められたに過ぎない。この標本について偶然認められた可能性も含めて、さらにより詳細な検討が必要であろう。

どのレベルの教育を受けさせたいか(受けさせたいと思っていたか)については、男の子について特徴的な年代差が認められ、30歳代よりも若い世代では「本人の意志による」とする者が多く(約半数)、40歳代以上の者は「大学」までとする者が多くなっている。この傾向は女性よりも男性でより顕著である。若い世代は当人の意思を大切にしたいと考えており、40代では大学への進学が必要であることを、現実生活を通して感じていることを窺わせる。

一方女の子については、これと類似の傾向が認められ、やはり女性に比較して男性の回答者の方が、年代による差が顕著である。40歳代以上になると女性では男性とは異なり短期大学・専門学校を選択する者が多くなっている。

家族形態については、男の子について、男性では「協調性のある子」が三世代家族で他より多く、女性では「誰にでも好かれる子」が夫婦家族で他より少ない程度で、家族形態による相違はさほど明確でない。より複雑な家族形態で暮らすほど、協調性や他人から好かれることの大切さを意識すると思われる。

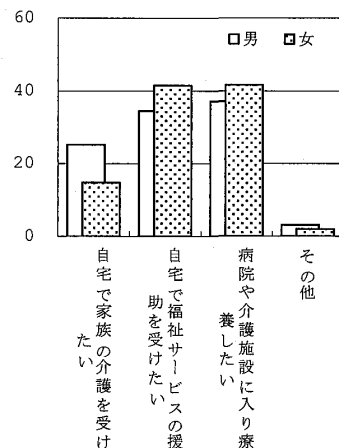


図29 体が不自由になったらどんな介護を受けたいか (男女比較)

#### 4. 受けたい介護の形態について

高齢になるに従って、万が一の場合の介護の受け方についても関心が高くなると思われる。これは、家族の在り方等とも関連すると思われる。

図29のとおり、「病院や介護施設に入り療養したい」、「自宅で福祉サービスの援助を受けたい」が多く、「自宅で家族の介護を受けたい」がかなり少ない。一昔前には自宅で介護されることが普通であったが、時代の変化に伴って、自宅での療養を願いながらも、福祉サービスを受けること、施設に入ることを現実的に選択している傾向が窺える。

性差に注目すると、体が不自由になったときの受けたい介護の形態については、男性ではこれらの差が相対的に少ないが、女性は、自宅で家族の介護を受けたいとする者が少ない。女性は、家族に対する期待が薄い。現

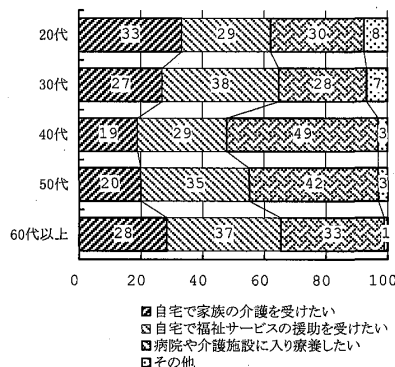


図30 どのような介護を受けたいか (男性)

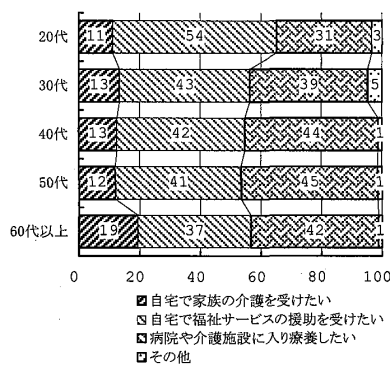


図31 どのような介護を受けたいか (女性)

実的に無理であると感じているのかも知れない。

年代の差に注目すると、男性については、40～50歳代の者が「自宅で家族の介護を受けたい」とする者が他の年代に比較して少なく、「病院や介護施設に入り療養したい」とするものが多い。これ以外の若い世代と60歳代以上の高齢者では自宅で家族の介護を受けることを望んでいる。若い時代は理念的に、高齢者は現実の問題として、家庭での介護を望ましいものと考えているようである。

他方女性については、先に述べたように「自宅で家族の介護を受けたい」とする者が男性と比較して少ないが、年齢と共に微増しており、家庭における介護が適切であると考えられるようになることを窺わせる。この傾向と共に「病院や介護施設に入り療養したい」とする者も、年齢と共に増加していることを考えると、アンビバレントな状況があるのかも知れない。

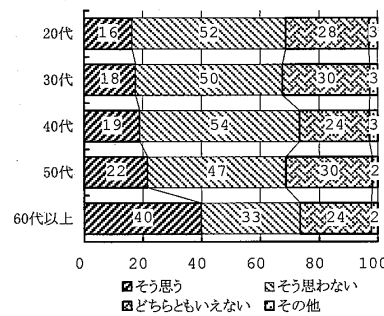


図 32 「男は仕事、女は家庭」という考え方に (男性)

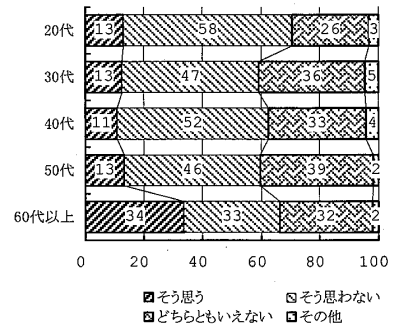


図 33 「男は仕事、女は家庭」という考え方に (女性)

## 5. 男女共同参画社会に関連する意識として

「男は仕事、女は家庭」なる考え方に対しては、否定的な認識が半分近く認められる。男女差があるが、これを肯定しているものは、30%弱認められる。このような考え方が、基本的に受け容れられなくなっていることが窺える。

性差に注目すると、男性の方がやゝこれを肯定する傾向が強い。

家族形態の相違については、男性では、夫婦のみ、二世帯家族、三世帯家族となるに従ってこの考え方に否定的傾向が強い傾向があり、その一方で「どちらとも言えない」との考え方が三世帯家族でやゝ多い。女性では家族形態による差は認められない。

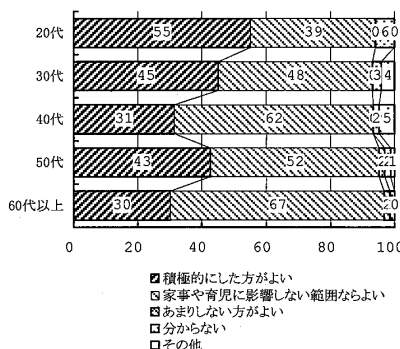


図 34 女性の能力開発や社会参加に (男性)

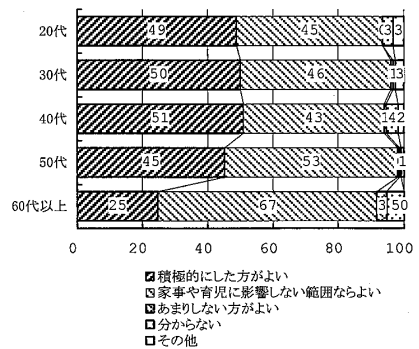


図 35 女性の能力開発や社会参加に (女性)

年代については、60歳代以上の高齢者で、男性女性とも肯定する傾向が、他の年代よりも多い。

「女性が能力開発のために学ぶことや社会参加すること」に対しては、積極的にすべきであるとするものは40%弱であり、女性が社会で活躍することを受け容れる傾向が認められる。ただその一方で、半数以上が「家事や育児に影響しない範囲ならよい」としている。女性がまず家事

菱 田 陽 子

や育児をすることを期待されていることがここでも明らかになっている。

これについての性差は認められない。

年代による相違については、男性では年齢と共に「積極的にすべき」との受け止め方が減少している（50歳代で一時的に増加しているが）。これに対して女性では、60歳代以上の者のみが肯定する傾向が少ない。年齢の高い者の方が「家事や育児に影響しない範囲ならよい」とする傾向が強く、女性が社会で活躍することに対する社会的支援環境が整っているとは必ずしも言えない。

最近の少子化傾向がどうして生じたと考えられるかにつ

いて尋ねているが、これによれば、「子育てにかかる経済的負担が大きい」、「女性の晩婚化・未婚化による」、「仕事と育児の両立がむずかしい」、「子供より自分の余暇を充実させたい人が増えた」等がその原因として挙げられている。経済的負担が大きく、これと特に女性の仕事との両立、自分の生き方を考える親たちの姿も窺える。

性差に注目すると、男性よりも女性の方が、「女性の晩婚化・未婚化による」と思う傾向が認められ、逆に男性が女性よりも「子育てにかかる心身の負担が大きい」、「子どもを持たないことについて、社会が寛容になってきた」と思う傾向が認められる。

年代については、若い世代の方が「子育てにかかる経済的負担が大きい」を挙げ、高齢者が「女性の晩婚化・未婚化による」をより多く挙げる傾向にある。この傾向は男女ともに認められるが、とくに男性では、60歳代以上に比較して他の年代では「子供より自分の余暇を充実させたい人が増えた」とする者が相対的に多い。

家族形態については、女性回答者のうち、二世世代家族が少子化の原因として「女性の晩婚化・未婚化による」を他の家族形態の者よりも少なく選択している程度で、明確な相違は認められない。

また、「女性が就業していることが、結果として少子化を招いている」との考え方の受け止め方についても尋ねているが、「大いにそう思う」は15%内外、「そうかもしれないと思う」が50%、「そうは思わない」が1/3である。「そうかもしれない」と答えた半数はよくわからないと答えているとも解釈できる。女性の30代以外全ての年代で、約半数がそうかもしれないと答え

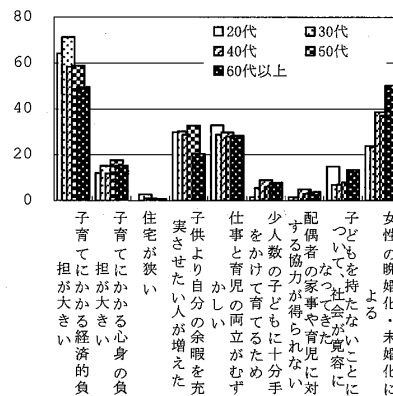


図 36 少子化の原因は (男性)

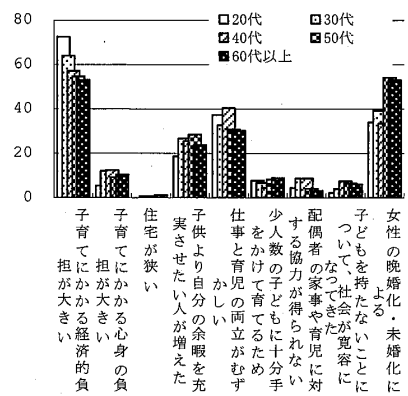


図 37 少子化の原因は (女性)

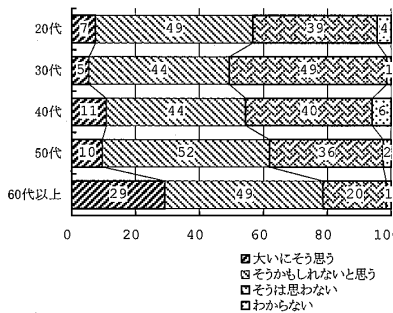


図 38 女性の就業は少子化を招くか (男性)

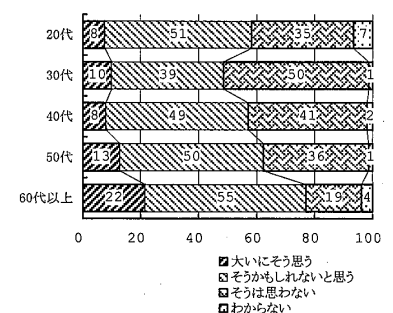


図 39 女性の就業は少子化を招くか (女性)

ているが、30代女性は半数がそうは思わないとしている。20代女性の半数がそう思うと答えているので、出産する年齢層の女性の意識がどちらに傾いているかは明らかではないが、この意識の曖昧さが今後の女性の就業と出産を左右するとも考えられ、注目したい。

性差は認められないが、年代については、これを否定する者が60歳代以上の者を除いて40～50%程度あるが、60歳代以上ではこれを否定する傾向は相対的に少なく、肯定する傾向が他の年代に比較して明らかに多い。

女性の就業と出産率の向上は、男女共同参画社会実現の中心的課題の一つと考えられる。

## 6. 女性が働きつづけるための環境

男女共同参画社会の実現のための大きな課題である、女性が働き続けるための条件として、男女とも「育児・介護休業制度を取得しやすくする環境づくり」、「保育施設や保育時間の延長など保育サービスの充実」、「育児などによる退職者の再雇用制度の普及」等が特に多く挙げられている。女性が仕事と育児を両立させることができるような環境作りが必要であることを示唆している。

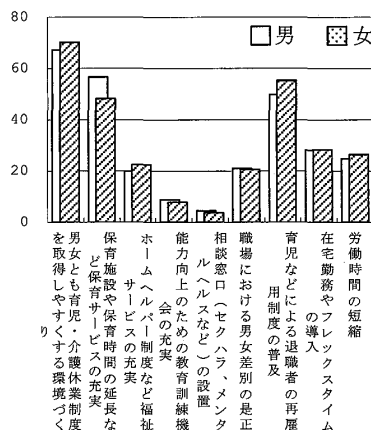


図40 女性が働き続けるためには(男女比較)

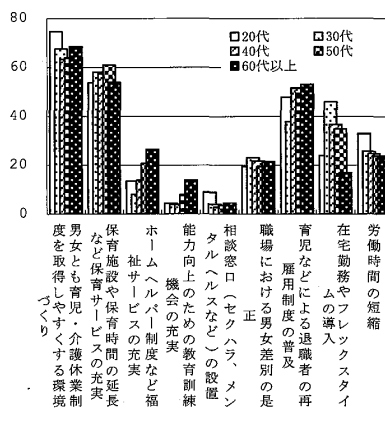


図41 女性が働き続けるためには(男性)

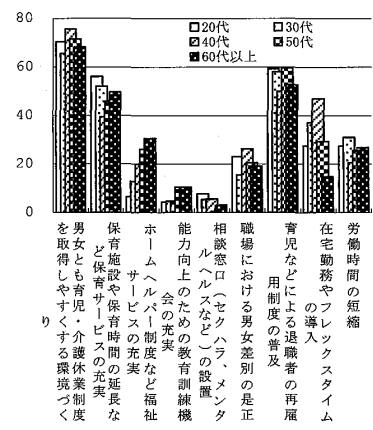


図42 女性が働き続けるためには(女性)

これについての性差が認められたのは、「保育施設や保育時間の延長など保育サービスの充実」については男性の方が、「育児などによる退職者の再雇用制度の普及」については女性の方が、それぞれよりその整備が必要であるとしていることが示された。子育てに関わっている親からの社会的支援の必要性、女性の就業環境の整備について、男女間での認識の差が示された。

年代による相違も認められ、「ホームヘルパー制度など福祉サービスの充実」、「能力向上のための教育訓練機会の充実」については、男性女性とも年齢とともに増加する傾向が窺える。ただ、このいずれもその数はさほど多くない。むしろ「在宅勤務やフレックスタイムの導入」の指摘は多く、これについては比較的若い年齢層で多く見られるが、男女でやゝ傾向が異なり、男性では30歳代が、女性では40歳代がそれぞれピークとなっている。

家族形態については、女性が働きつづけるために必要なものとして、男性について、「保育施設や保育時間の延長など保育サービスの充実」を二世帯家族で少なく、「能力向上のための教育訓練機会の充実」を夫婦家族でより多く挙げられているが、それ以外については相違が認められ

ない。

以上が凡のこの分析で明らかになった事柄であるが、白山市を構成する旧地域を、松任、美川、鶴来、白山麓の各地域に分け、これらの各地域の歴史的・文化的背景の相違が、各質問項目への反応の相違を生じさせると予測し、反応傾向の比較を試みた。しかし、既に述べたとおり、一部を除いて明確な相違は認められなかった。歴史的・文化的背景を異にするにもかかわらず、ここで扱っている事柄については、ここでの分析に関する限り、その相違を明らかにすることは出来ず、また、ここで用いられた質問項目ではこれらの間の相違を捉えることが出来なかったとも考えられる。

### 全体的検討

以上の分析により、大凡以下の事実が明らかになった。即ち、男女共同参画社会の核とも考えられる、家庭における仕事の分担では、男女ともに、妻の役割とするものが夫の役割としているものより遙かに多い。食事のしたくや洗濯、日常の買い物は、圧倒的に妻の役割になっているが、これらの項目は、多くの妻達が、夫の役割として望んでいないものであることも推測される。妻が望むような栄養バランス・添加物への配慮などを含んだきめ細かい気遣いのある食事のしたくを夫に期待できたり、繊維による仕分け、洗剤の選択などの配慮をした洗濯を夫に期待できる割合が必ずしも高くないことが推測される。これらのことを含め、男女共同参画社会の視点から、いかなる家事分担が適切であるかは単純ではない。共働きか家事専業かなど就業形態によっても分担の実態、望む分担内容などに相違があると想定し、分析を試みたが、今回の調査では、図2のように、それぞれの就業形態に属する人数に大きなばらつきがあり、カテゴリー化することが困難であった。今後はこの視点から、適切なグループ分けによる調査・分析も必要であろう。結婚後も引き続き共働きをしてきた女性、家事・子育てを中心にパートなどの仕事をしている女性、家事専業の女性間に意識の違いがあり、希望する家事分担に相違点のあることも予測される。このようなカテゴリーによる分析から、夫婦の実態、その望む形に即した家事分担を明らかにし、男女の認識のあり方を調整することにより、男女共同参画社会の実現に向けた家事分担の形がより明確になるであろう。家事分担の一律化が男女共同参画社会に望まれているわけではなく、男女間、年代間、職業形態により、適切な認識の調整をはかり、個人志向のみではなく、社会への貢献、個々人の社会的役割意識などを高める視点からの家事分担の見直しが必要と考える。内閣府(2006)による「平成18年男女共同参画社会の形成の促進施策」にも女性自身のチャレンジ支援が述べられ、それを支える男性の意識改革が望まれている。

次世代を担う子どもの教育を含む育ちに関して望む点として、大人が、男の子、女の子に獲得して欲しいと望む資質に違いがあり、次世代の男女共同参画社会の実現の進展に課題が残されていることが明らかとなった。具体的には、男の子には、「責任感の強い活発で行動力のある思いやりのある子」を望み、女の子には、「家庭を大切に、誰からも好かれ、思いやりがあつて、気配りのできる子」を望んでいる。この姿からは働く女性に必要な自立性が養われるとは考えにくい。「職業能力のある女の子」に関しては、女性が多少多く望んでいるが、男女共に殆ど望んでいない。大人のこの思いには居住する地域の文化、環境の影響が大きいと考えられる。次世代

に継がれる男女共同参画社会の実現を考えるには、地域の文化、環境を創り上げている住民の意識改革が早急に望まれる。更に、子ども達の成長に遅れないよう、行政の地域支援が望まれる。又、教育程度も男の子、女の子では明らかな違いがある点にも注目したい。男の子には、大学教育を望み、女の子には、大学と短大・専門学校を同程度に望んでいる。女の子には本人に任せると考えている割合も多い。これら男の子、女の子に望む教育程度の差に関する意識の是正も男女共同参画社会の実現には早急に果たすべき課題であろう。

介護を含む援助が必要となる老後のあり方に関しては、福祉サービスを受けること、施設にはいることを望む割合が多いが、この傾向には課題を感じている。家族的な介護が、人間の心に必要不可欠であることを認識する必要がある。家族・家庭のあり方の変化も推測されるが、人々の心の養いが必要であろう。介護を経験している世代が家庭における介護を望みながらもその負担を子どもにかけたくないというアンビバレントな傾向の調整を図ることが望まれる。

男女共同参画社会の実現には、意識改革が重要であると言われているが、「男は仕事、女は家庭」という意識に対しては、60代以上で肯定する傾向がみられるものの、全体的には、肯定する傾向は少ない。ただし、60代以外でも肯定する者が1割から2割占めており、数の論理で男女共同参画社会の実現を考えるばかりではなく、少数の意識とはいえ、男女共同参画社会の実現にマイナスの影響が強いとも考えられる。このような意識の存在が、ある環境の中で生きる女性の社会進出を妨げていないか、注目しつつ見守る必要がある。女性の能力開発に関しては、「家事や育児に影響しない範囲ならよい」とする傾向が強く、50代、60代では女性のほうが男性より多い。子育てを終えた世代の女性が子育て世代の女性の能力開発を支援するのではなく、批判していることも推測され、女性自身の意識改革と、学びたい女性、働きたい女性の能力を伸ばすことができる社会環境の整備が早急に望まれる。又、少子化傾向の原因として、経済的負担と女性の晩婚化・未婚化、仕事と育児の両立の難しさなどが挙げられているが、自分の余暇を充実させたいと考える人の増加傾向も示されている。自己の充実と、社会への貢献を含む社会的存在としての自己の認識は、個人の成熟度に関わると考えられる。意識改革は社会的な意識と個人的な意識の総体とも考えられるが、適当な研修の場を増やし、成熟した個人の集まりである社会を目指す必要があるのではないだろうか。

次に「女性の就業が少子化を招く」という考え方についてであるが、山口(2005)は、「育児休業制度があるなら、有業女性の出生率は専業主婦の女性の出生率と比べて異ならないか、場合によってはむしろ高い」と述べており、内閣府(2006)でも、国際比較によれば「2000年時点では、女性の労働力率が高い国ほど、出生率が高い傾向がみられる」としている。ただし、日本の現状について内閣府(2006)は、「1970年には、アメリカやノルウェーなどに比べ日本の女性の方が多く働いていたが、70年以降、それらの国は女性の労働力と出生率両方を回復してきたのに対し、日本は、女性労働力の上昇幅は小さく、出生率は下がり続けている」としている。これらの調べでは、女性の育児と就業を可能にする社会環境の整備の重要性も同時に述べている。このことにより、日本の場合は、早急に社会環境を見直し、整備することがこの問題解決に不可欠であることが明らかなのではないだろうか。

少子化と就業に、大きく関係する、男女共同参画社会の実現に向け、女性が働きつづけるため

## 菱 田 陽 子

の具体的な条件整備に関しては、育児休業、保育制度などの環境整備とともに、在宅勤務やフレックスタイムを希望する世代差、男女差に注目し、その背景を探る必要がある。働く人々の実情と思いにそぐわない環境整備は結果を出すことができないと考える。男性では30代が、女性では40代が、女性の在宅勤務やフレックスタイムが必要と考える割合が多い。女性が40代になって、在宅勤務やフレックスタイムの形態を望むことに対しては、30代後半から40代以降、一般的な企業で働く形態の求人が激減し、希望する条件で働くことが難しくなること、教育費などのために一定程度以上の収入が必要な世代であることに加え、子どもの養育の観点から母親不在ではない家庭が望ましいなどの意識もあり、この形態を望むことなどが推測される。

以上、男女共同参画社会実現に大きく関わる、家事分担、次世代の子どもの養育、女性の就業と出産、老後の介護、意識について述べた。白山市の男女共同参画社会の実現に向けて、60代以上が6割を占め、無職が5割近い白山麓と、会社勤務が5割から6割で60代以上が4割に満たない他の地域では、求める社会の在り方も異なることが推測される。又、どの項目にも性差が認められたが、性差を無くすることが望ましいのではなく、個々の家庭に返して、男女共同参画の有り様を考え、地域社会との関係に広げる作業が必要と考える。その意味では、特色ある個々の地域の男女共同参画社会の実現が地域力になり、国の力につながることを思われる。

これらを総合的に考えると、男女共同参画社会実現には、意識改革により、個々人の自立した成熟度を高め、その主体的な参画型社会を目指すことが重要であろう。これらの調査・分析をもとに白山市で策定された男女共同参画計画が、実際に結果を出すためには、成熟した個人が求める自己実現と参画型社会の実現は相反するものではなく、一致した方向性を持つものであることの認識が深まり、広まることが重要であると思われる。かつ、人がもつ内面性の向上を常に視野にいった、男女共同参画社会の実現に向けて、調査結果をさらに分析し、必要な調査を加え、又、更なる分析を重ねていくことが今後の課題であると考えている。男女共同参画社会が実現するということは、男女共同参画に関する議論の必要性がなくなった社会であろう、とする議論もあり、この言葉が必要ではなくなる社会が目指されるべきであろう。

## 文 献

白山市『男女共同参画に関する市民意識調査：平成17年度版』2005年 p.73.

白山市『男女共同参画行動計画 白山21』印刷中.

内閣府『平成18年版 男女共同参画白書』2006年 p.218.

山口一男『少子化の決定要因と具体的対策：有配偶者の場合』経済産業研究所 政策分析論文 No.6 2005年 p.20.